



〒540-0024 大阪市中央区内淡路町 2-1-7-602

Tel: 06-4792-0011

www.plus-y-gallery.com

2016年1月発行  
582円(税込)

「東國のスサノヲ—物質の勝利と非物質の栄光」  
橋本 倫 (画家)

「資料が語る九州派  
—福岡市美術館 九州派展を訪れて」  
岡部 るい (福岡県立美術館 学芸員)

「極私的村岡三郎論」 北辻 良央 (美術作家)

「2003年 八月の馬」  
植木 啓子 (大阪新美術館建設準備室 学芸員)

「洗う女考:白」 吉本 直子 (美術作家)

「なにわ図絵—七坂随想」 きさらぎ 權

2016年10月発行  
782円(税込)

「80年代展『享楽と根源』出品作家インタビュー」  
I — 駒形 克哉 (美術作家)

II — 大森 博之 (彫刻家) + 橋本 倫 (画家)

「反復」(後編) 北辻 良央 (美術作家)

「なにわ図絵III—茶白山行」 きさらぎ 權

03

80's Interview I  
Katsuya Komagata  
80's Interview II  
Hiroyuki Omori  
Osamu Hashimoto  
Yoshihisa Kitatsuji  
Kai Kisaragi



80年代展「享楽と根源」出品作家インタビュー  
I — 駒形 克哉  
II — 大森 博之 + 橋本 倫  
「反復」(後編) 北辻 良央  
「なにわ図絵III—茶白山行」 きさらぎ 權



01

Osamu Hashimoto  
Rui Okabe  
Yoshihisa Kitatsuji  
Keiko Ueki  
Naoko Yoshimoto  
Kai Kisaragi



「作品の視覚的同一性とその力学について」 黒川 弘毅  
「洗う女考」(後編) 産婆と奪衣婆 吉本 直子  
「反復」(前編) 北辻 良央  
「なにわ図絵II—毛馬道行」 きさらぎ 權



02

Hirotake Kurokawa  
Naoko Yoshimoto  
Yoshihisa Kitatsuji  
Kai Kisaragi



「作品の視覚的同一性とその力学について」 黒川 弘毅  
「洗う女考」(後編) 産婆と奪衣婆 吉本 直子  
「反復」(前編) 北辻 良央  
「なにわ図絵II—毛馬道行」 きさらぎ 權



mysm + Y Vol.5 近日発行

「成島柳北『新柳情譜』二編評釈」 高橋昭男  
「絵画について」大森博之 ほか

詳細は mys m + Y ウェブサイトまで  
<https://mysm-plus-y.jimdo.com>

2016年9月発行  
582円(税込)

「作品の視覚的同一性とその力学について」  
黒川 弘毅 (彫刻家)

「洗う女考(後編) 産婆と奪衣婆」  
吉本 直子 (美術作家)

「反復」(前編) 北辻 良央 (美術作家)

「なにわ図絵II—毛馬道行」 きさらぎ 權

2017年6月発行  
782円(税込)

「90年代展『終末と反復』出品作家インタビュー」  
越前谷 嘉高(画家)+黒須 信雄(画家)+竹内 義郎(画家)

「試論—造形芸術のトライアングル」  
峯村 敏明 (美術評論家)

「黒坊主」 村山 友一郎

「なにわ図絵IV—真田山道行」 きさらぎ 權

04

90's Interview  
Yoshihisa Echizenya  
Nobuo Kurosu  
Yoshiro Takeuchi  
Toshiaki Minemura  
Tomeichiro Murayama  
Kai Kisaragi



90年代展「終末と反復」出品作家インタビュー  
越前谷 嘉高 + 黒須 信雄 + 竹内 義郎  
「試論—造形芸術のトライアングル」 峯村 敏明  
「黒坊主」 村山 友一郎  
「なにわ図絵IV—真田山道行」 きさらぎ 權



## 『ミズムプルスワイ』(1~4号) 抜書き

### 1号

★芸術の存在意義の動揺は、現代に限られた現象ではない。しかし、膨大な情報  
が電子空間を飛び交い、全てが消化不良のまま猛スピードで断片化されていくこ  
の瞬間にあつては、尚一層重大な意義を持つ。何故ならば、それは人間に於いて  
固有たるべき時間論の問題——「不死・永遠」論——と関わるからだ。

——東國のサノノー物質の勝利と非物質の栄光(橋本倫)

★週一くらいで学校帰りによく喫茶店に立ち寄ったことがあつた。抑圧する権力  
者に対する憎悪を静かに語られ、大病の後一切の抑圧的思想から自らを開放して  
いこうと決めたと、話されていた。消費税が導入された頃、白い一円玉が軽く扱  
い難いからか、捨てるといふかばら撒いておられた。かつて十円玉を二枚重ねて  
ポケットの中で始終擦り合わせ、いつしか磨り減つてしまつた作品があつた。お  
金は象徴的なものとしていつも一番身近にあつたのだろう。

——極私的村岡三郎論(北辻良史)

★定家と並び称された藤原家隆は、隠岐に流された後鳥羽院を慕い敵対する幕府  
をかえりみず秀歌を送り続けたという。

ちぎりあれば 難波の里にやどり来て

波の入り目を おがみつるかも

定家の華々しい活躍の影になりがちな家隆であるが、それ故に心の機微に寄り  
添えたのかもしれない。晩年この地に「夕陽庵」を結び日想観を修めたという。

——なにわ図絵—七坂随想(きさらぎ權)

### 2号

★作品の金属光沢は永続せず、グラインダーで切削している最中からその減退が  
始まつている。

私は製作直後の輝きを維持しようと思わないが、たいていは少し時間が経過して  
から表面にワックスを塗布している。

過剰な光の反射のなかでは、私が作業中に感じたかたちの充実が鑑賞者たちに把  
握され難いだろう。

それでも地上では、生まれたての作品の姿を見ることができた人々は幸せかもしれ  
ない。

——作品の視覚的同一性とその力学について(黒川弘毅)

★戻れぬ時と場所への思慕(すなわちケガレ)を抱える者を白い衣服が包みなが  
ら儀礼が進行し、不安定な時期を越え新たな状況が到来したことのしるしとして  
の色直しが催される。その後には新しい秩序のもとの平常が続いていく。しか  
し、ここに一つの疑問が浮かび上がる。儀礼のあいだ白を纏いながらも色直しが  
経験しない者がいる。それは棺の中にいる死者だ。死者は色直ししないために、  
ずっとケガレの状態にあるのだろうか？ 死者の通過儀礼は完了するのだろうか？

——洗う女考(後編) 産婆と奪衣婆(吉本直子)

★大阪港の岸壁のとある広場、空には雲雀がきらきら囀り、浜風が心地よい。  
ちよつとはじめに働いて生活の糧を得ようなど全く考えもしない三人の若者  
が、岸壁沿いのベンチで日向ぼっこをしていた。絵に描いたようなノー天気とい  
うかヒッピー風の男たちで、まあ、誰も絵に描こうとは思はないが。真っ青な空  
と穏やかな海に白い鳥たちが乱れ飛び、時折間延びしたボーッとという音が、港  
のその一隅だけを気急くしていた。太陽は上天にあり真ともに彼らの頭に落ち三  
人は目を半眼にして微睡んでいた。

——反復・前編(北辻良史)

### 3号

★……あの……ファブロの教室にいとみんなアルテポヴェラみたいなことば  
かりやつているから、そんなのがちよつと飽きてくるんですよ。で、なんていう  
か……まあ、人体に対する興味を掘り下げたい気持ちも出てきて、やつていくう  
ちに、アルテポヴェラの人たちをよく見ると、すぐく人体について拘りという  
のがあつて、特にファブロナんかも、ぼつと見たところそんなにもないように思  
いますが、でも、実際にはすぐくそういふのがあつた。暗示的にやつているなあ  
というの、気が付いてきた。あそこにある作品(『偽オウイデウス』『変身物語』  
より『ミダス王の金貨』)ミダス王の話の、要するに、異本のミダス王の偽書なん  
ですけれど、オウイデウスの『変身物語』のミダス王のところに隙間を見つけ

て、そのところに作り物の四行を挟み込んだんですよ。

——80年代展『享楽と根源』出品作家インタビューI(駒形克哉)

★言葉にするって大切ですよ。つまり、いい作品は、パロールを誘う潜在的な  
言語性というか、テキスト性を必ず伴っているし、美術の生成現場では、必ず言  
語的テキストとセットで深く相互干渉する現象が見られます。(橋本倫)

★俺はあまりそういうことを考えていないけど、確かに石膏の状態と、ブロンズ  
の状態になるのとは、ちよつと違う。圧倒的にブロンズは、形が見えてきて強く  
なつてくるんだけど、やつぱり石膏の持っている、いわゆる物質的に強くない。  
あれが、すごくいい……。(大森博之)

★……それくらい美術のロジックつてのは、もつと高いレヴェルのものだし、統  
制的理念に通じるような手に負えない部分を持っている。怪物的なそれを、やつ  
ぱり見たいんです。そういつた作品つて、実はとてもアクティブですから、目  
にする、つくづく生きてよかつたと思わせられますよ。美術というものに  
対し、ダリもそうですけど、凄まじくナイーブなほどに高い信頼感を持っていま  
すよ。ダリなんか終生ヴェラスケスの前で画学生のように振る舞っていたけれど、  
あれは本音ですよ。好きなんです。問答無用でいいと思つていってますよ。  
ラファエロとヴェラスケス。(橋本倫)

★現実の世界つていうのを、絵面だけで、見ていなくてもいいものね。パッと  
見てそういう、視覚以外のものを感じているから、一瞥で引つかかるわけで、感  
じているからね。(大森博之)

★フランクシーは、そのところを良く解つていた人です。あの人が言つた見事  
な発言には、サルトルが言つたことに近いものがあります。(橋本倫)

★……作品つて画面上でバトル状態、矛盾するかもしれないけれど……作品の中  
に批評がないと面白くないじゃないですか。なびすの黒須さんにしても、こゝ煮  
え切らない面白さがあるんだね。だから、なびすの作家、俺も含めてだけれど。  
なびすの真倉さんも、もつと前に出てとか言うんだけど、要するに逡巡の躊  
躇の仕方が、やつぱり面白いんだよね。(大森博之)

——80年代展『享楽と根源』出品作家インタビューII(大森博之+橋本倫)

### 4号

★……純粹に絵画が担うべき役割というのはその多くはなくて、昔から今でも絵  
画という表現が根本的に問題にしているのは、人間の視覚とその認識とは何なの  
か、どういう性質で、どういう限界があるのか、というようなことです。そうい  
う人間の認識のあり方が人間の精神のあり方なんだらうし、世界の認識のあり方  
であり、世界との関わり方になるんだらうし……、そういうことを絵画的造形と  
して創つていくとしたらどんな風になるのか。今考えているのは大体そんなこと  
です。(越前谷嘉高)

★何が顕現するのと言つと、不可視性でも言うべきものが、不可視なものが  
可視化されたものとして……、自分にとつて不可視なものって何かということ当  
たりが見つけられないのですよ……。あくまで不可視なものつていう概念だけが、  
あたかもあるようで、……それを何かかたちにしていく過程のような気がするん  
ですよ。例えばアイコンだとか宗教画とかつていうのだったら不可視なものとし  
ての対象は予め定まっていると思いますが、そうじゃなくてそれでもなおお且つ、  
描かなければいけないとすれば、不可視性という概念としてそれを描いていくと  
いうことです。(竹内義郎)

★作品のタイトルで古事記などから引用することを始めたきっかけは、前にも書  
いたことがありますが、『独神』に引つ掛かつたからです。独神というのは古事  
記の一番冒頭に出てくる神ですが、因みに日本書紀には出てきません。現れると  
同時に消えていく、身を隠したまま顕れるという、出現が即消滅である、という  
神です。その有り様つて一体何なのか……。(黒須信雄)

——90年代展『終末と反復』出品作家インタビュー

(越前谷嘉高+黒須信雄+竹内義郎)

★芸術作品を見るとき私の受容器の中で、判断を左右する一定の基準というか  
構図が働いているらしいと気づくようになった。美術史や美学に疎い人間のこと  
だから、あくまでも自家製の構図である。自家製といっても、観察という経験の  
積み重ねの底からおのずと浮かび上がつてきた(訪れてきた)構図であり、私が  
勝手に作り、描いたものとは言いがたい。むしろ、一個人の受容器に映じたから  
には、元をただせば芸術という現象自体の内に客観的に存在していた構図である  
にちがいない。そう確信させるだけの超個人的な真実味を、それは帯びていたの  
である。——試論—造形芸術のトライアングル(峯村敏明)